

絵本に見る親子関係 —親と子どもの絆 スタイグの作品を中心に—

桑名 恵子¹

キーワード：父親の目、ウィリアム・スタイグ、松居直

1. はじめに

「心の世紀」といわれ、スタートした21世紀。わが国の子どもたち、その親たちは幸せ色に輝いているのだろうか。本稿は、現代の子どもの人間関係とくに親子の関係について注目し、絵本のなかでみられる親と子どもの絆について検証する。とくに「人間の温かさを伝え続けた作家」ウィリアム・スタイグの多くの作品にながれている人と人のむすびつき、とくに親と子のきずなに触れる。

また、福音館書店会長・児童文学研究者である松居直が著した絵本論から絵本の体験と親子の絆の形成の関係についても検証する。

2. 現代社会の家族の変化

2. 1 家族の揺らぎ

今、家族が揺らいでいる。家族があっても家庭がない。また、子どもたちの多くは自分の居場所がないともいわれる。家族の危機感や家族の閉塞感が高まり、自分の家はあっても、親との生活が空洞化しているともいわれている。家庭は今、子どもが十分自己を発揮し、満足感や幸福感をもてる環境であるか、また、傷ついたとき心身を癒す場所になりえているか。

保育現場からは、子どもたちの変化を訴える報告が多くなった。生活習慣が乱れ、疲れやすい。また人間関係が乏しく、イライラしやすく、ささいなことでもトラブルを起こしやすいなど情緒の不安定な子どもたちがめだつという。その背景には、家庭での養育態度や家族の有りようや親子の愛着関係の問題をあげる声大きい。

本稿は、児童虐待をはじめ、家庭崩壊や家族の人間関係の希薄化などさまざまに論議されるなかで、「家族」の本質を描いた絵本を取り上げ、「家族の絆」「親と子ども」を再考するものである。

2. 2 家族の行方

少子化時代が続くなかで、子どもを取り巻く環境が激変し、それに伴い、地域社会や家庭も著しく変化してきた。2006年秋田県で起こった事件では、母親が娘を橋から突き落とし、近所の小学1年生の男児も殺していた。大仙市では母親が用水路に息子を放置して死なせた。また、滋賀県の長浜市では、幼稚園児2人が同じ園児の母親に殺された。子どもたちが家族のなかで人間性を欠いた大人の犠牲になった事件が頻発し、2007年には、高校生や中学生が自分の親を殺害する事件が起こっている。どうしてこのような事件が起こるのだろうか。

人と人の結びつきにおいて、最も基本的な家族のなかで起こるさまざまな事件。家族の有りようはどこで方向転換をしてしまったのか。そして、それは修正が可能なのであろうか。再生という文字は見えるのか。

¹ Keiko KUWANA 千里金蘭大学生生活科学部児童学科 (受理日：2007年11月8日)

3. 家族とは

3. 1 松居直の家族観

家族の危機感や閉塞感については、今から30年前にすでに警鐘をならした人がいた。わが国に絵本づくりの開祖ともいわれる福音館書店会長の松居直は1978年に、「絵本を見る眼」という絵本論を著した。そのなかの序章で“ことばの体験と絵本”について、次のような文を書いている。

『今、家庭で、大人は一体何を子どもに語っているのだろうか。自分の声で、自分の言葉として子どもの耳に語りかけている、そんな言葉があるのだろうか。そして幼児は誰から、何を聞いているのだろうか。どんな言葉を耳にして育てているのだろうか。それらは、子どもたちが、やがて大人になったとき、豊かな言葉の体験を持ち、言葉に対して鋭い感受性と信頼感を持ちうる力となりうる言葉なのだろうか。私は疑問に思う。言葉は、すでに家庭から失われている。言葉は、夫婦の間からも、親子の間からも失われている。人と人との言葉が失われていることは、人間関係が希薄になっているか、あるいは失われていることを意味する。人間関係が希薄になった家庭は、すでに家庭の意味を失い、同居という方に変質しているのではなからうか』¹⁾

松居は「家庭においての言葉が失われていくことは、親子関係、人間関係が希薄になることであり、そこに集合する人々の集団はもはや家族ではなく、同居人にすぎない」と述べる。松居は本来あるべき家庭の役割を果たさなくなった現実を嘆き、家庭における対話、会話の重要性を説く。

『家庭こそ、本当の言葉が語られる場ではないのか。子どもたちは、家庭でかわされるあたたかい人間らしい言葉 やさしくもあり、きびしくもあり、愛情にみち、怒りにあふれ、ときに苦しみや憎しみから出る言葉を、豊かに聞いて育てこそ、言葉に対する豊かな感受性を養い、言葉に対する信頼感を持ちうる人間になるのではないだろうか』¹⁾と。

言葉は単に言葉として存在するわけではない。言葉として発生されるには、人間として多くの体験・経験（うれしいこと、悲しいこと、つらいこと、さびしいこと、いやなこと、悔しいこと、驚き、怒り、悩み、喜び、希望、失望、落胆など）から生まれる感情が必要である。その感情を言葉に託して表現し、私たちは人間関係を構築しているのである。

松居は、本来ならばその感情の表出である言葉を家庭内で、家族の間で交わしてこそ家庭の役割が果たせ、家族の絆が結べるという。

しかし、現実には、松居は事例として、現在の家庭でもっとも多く発せられる言葉、母親から子どもへ伝えられる言葉は“早く、早く”であり、父親の言葉は“ああそうか”だということを紹介した。そこには、常に母親から追い立てられ、父親からは関心を払うこともなくそっけない態度で接しられ、困惑している子どもの表情が見える。いやそれではいけない。本来私たちが人間らしい言葉を発し、その言葉に聞き入ったときの記憶をたどらなければならぬと松居は、母親から赤ちゃんへ語られる言葉の重さを説いた。

3. 2 赤ちゃんへことばを渡す

松居は赤ちゃんのときにそそがれた言葉について次のように語る。

『赤ん坊が生まれた時、すべての赤ん坊は、もっとも人間らしい、喜びに満ちた、豊かな言葉をそそぎかけられたはずである。誕生と同時に、人間が最初にぶつかる文化は言葉である。生まれたばかりの赤ん坊を抱きながら、始終無言でいる母親はいない。赤ん坊がわかってもらわなくても、母親は語りかけていた。お乳をのませながら、あやしながら、おむつをとりかえながら、お風呂にいれながら、ねかせながら、やさしく、心をこめて語りかけていた。それは、何の代償も求めない、一人の人間の心の中から語られる、もっとも人間らしい言葉である。私たちも必ずそうされたはずである。確かに“言葉があった”のである。そしてこれが言葉の原体験であり、言葉の基本的な姿である。私たちの言葉はここに発している。言葉は母なる言葉であり、母の言葉である。幼児の言語教育、言語体験を考えると、この赤ん坊のときから深く考えてみなければ、基本が見失われてしまう。もちろんこのとき語りかけられた言葉は、私たちの記憶には残っていない。しかしそれはあるのだ』¹⁾

下線を引いた箇所は、保育士を目指す児童学科の学生が“保育内容（保育総合）”や“乳児保育”の授業におい

て学ばなくてはならない1999（平成11）年版『保育所保育指針』²⁾の総則に述べられている保育の基本である“養護と教育の一体化”をあらわしているものとして、筆者はとらえた。

赤ちゃんは当然のことながら、なにひとつとして大人の援助なしに生きてはいけない状態でこの世に生まれてくる。食べること、寝ること、息をすることさえ、大人の助けがいるのである。そんな頼りなくあぶなげな赤ちゃんだが、少しずつ身の回りの世話をしてくれる母親や保育士を認識していくようになる。

いつも変わらないやさしい扱い、手の感触、手触りと必ず交わされる会話。それが赤ちゃんに感じられるのである。「○○ちゃんおっばいですよ。お腹すきましたか」「○○ちゃん。おむつ替えますよ。いっぱいでてね。ほら気持ちよくなりましたね」「気持ちよくなってご機嫌ですね。○○ちゃんのご機嫌でわたくしもとてもうれしいですよ」など身のまわりの世話をしながら、自然に発せられる言葉は、赤ちゃんの気持ちに添うやさしいものになる。この語りかけが赤ちゃんの耳にどう伝わっていくのか、科学的に立証されているわけではない。しかし、確かに赤ちゃんには届いている。やさしい手触りとともに聞こえる柔らかな声。やさしい言葉に赤ちゃんは聞き入っている。

この過程はまさしく保育の基本である“養護と教育の一体化”を実践したものであるといえる。母親の献身的な愛情は、何の代償も求めない。赤ちゃんが快適になり、気分も良くなるように働きかける。そして、それを行うことで、母親自身も満たされていく。赤ちゃんが微笑む。伸びをする。赤ちゃんが動く。赤ちゃんの反応は母親としての自覚も育てていく。

保育所や乳児院では、母親に替って保育する保育士がこの“養護と教育の一体化”つまり保育の基本を十分認識し、乳幼児に接することが重要であり、それを実践できることが保育士として最も求められる素養であるといえる。

3. 3 家族の定義

ではここで家族の定義を明記しておく。小学館「大辞泉」では、家族とは『夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団。近代家族では、夫婦とその未婚の子からなる核家族が一般的形態』³⁾と記されている。つまり、父親、母親、子どもの2世代の最小の単位を家族と呼ぶということになるが、3世代の家庭もあれば、夫婦だけの家庭もある。親から独立して単身で暮している人も家族の一員であり、人は誰でも家族の一員として生まれてきたといえる。

4. いのちと向き合う

4. 1 「あかちゃんのゆりかご」

家族を取り巻く暗い事件が多いなかで、まずはじめに本来の家族のあり方をじっくり考えさせてくれる絵本を紹介する。アメリカの絵本作家のレベッカ・ボンド作の「あかちゃんのゆりかご」である。この絵本は新しい家族が生まれてくる一家の物語であり、家族の絆を描いた傑作であるといえる。

絵本紹介：『あかちゃんのゆりかご』

■ 書誌情報

絵本の題名 : あかちゃんのゆりかご
絵本作家 : レベッカ・ボンド
絵 : 同上
訳 : さくま ゆみこ
出版社 : 偕成社
出版年 : 初版2002年1月1日発行
印刷／製本 : 小宮山印刷／東京美術紙工製本
サイズ・ページ数 : 26×26cm 32P



「あかちゃんのゆりかご」 レベッカ・ボンド作・絵 さくま ゆみこ訳
偕成社 2002年

◇ 本の内容あれこれ

「あかちゃんが生まれてくるとわかったとき、家族はみんなでおよろこびしました」とはじまるこの絵本。表紙をめくると2ページを見開きにし、画面いっぱいにあかちゃんが生まれてくるというニュースに喜びあう家族が描かれている。このはじめのページは作家の力強いメッセージが込められている。あかちゃんが生まれてくると。それは家族にとって、大イベントである。両親と息子、そして祖父母が踊って喜びあうシーン。こんな風に家族の誕生を期待できればすばらしい。

そして、家族が生まれてくるあかちゃんのためにそれぞれの思いをこめて、“ゆりかご”を作っていく。父親は板でゆりかご本体を作る。すべすべの板に囲まれたゆりかごを。

あまりに素敵にできあがった“ゆりかご”でひとやすみする父親。次には祖父がゆりかごに白いペンキを塗り、いろいろな絵を描いていく。動物の絵、広いひろい海の絵、祖父は生まれてくるあかちゃんに“地球”を感じてほしいと願う。そして、祖父もできあがったすべすべの板に囲まれたゆりかごでひとやすみ。きれいに仕上がった“ゆりかご”を見て、祖母はゆりかごのカバーが足りないと感じる。祖母は今までとっていた家族の服地を丹念に1枚ずつ縫い合わせながら、キルトにし、ゆりかごのカバーを仕上げていく。一針、一針家族の思い出にひたりながらあかちゃんが無事誕生してくることを願って縫い上げていく。ようやくできあがったカバーをかけ、祖母もすべすべの板に囲まれた“ゆりかご”に入ってひとやすみ。

次は兄になる息子の登場である。どんどん立派になっていく“ゆりかご”を見て、それでもゆりかごにつきもののモビールがないことに気づく。あかちゃんはいつもゆりかごで寝かされるのだから、寝ながら楽しくなる動くおもちゃを作らなくてはとおもちゃのモビールをつくりゆりかごにぶらさげた。満足した息子もすべすべの板に囲まれた“ゆりかご”でひとやすみする。

Rebecca Bondová Čiháková
Z. KČSPRAPH. S. L. S.



そして、母親は家族みんなが作ってくれた“ゆりかご”に満足をしなが、それでも足りないもの、外界との出会いを“ゆりかご”に託す。ゆりかごを外の星空や月が見える窓ぎわへもっていく。なんと家族のみんながあかちゃんの“ゆりかご”にそれぞれ思いをこめ、働きかけたことか。そして、無事待望のあかちゃんが誕生する。「あかちゃん、はじめまして。みんなであなたの生まれてくるのを心から待っていましたよ」と家族のみんなはおおよろこび。あかちゃんのかわいいこと。みんなであかちゃんにあいさつをする。

あかちゃんをはじめはおちついてたが、しまいに泣き出してしまふ。どうもあかちゃんは眠いらしい。おじいさんがあかちゃんを抱いて、他のみんなもそろってゆりかごへ。

あかちゃんをあゝの“ゆりかご”に入れる。あかちゃんはすっかり安心して、その“ゆりかご”で静かに眠る。外には星も月も出ている。

この絵本のすばらしさは、ひとこと。あかちゃんってこんなに家族から待たれて生まれてくるんだということ。あなたもわたくしもみんな。誰でもこうやって命をもらって命の花を咲かせることができるということ。そして、家族ってすばらしいということ。

作家のレベッカ・ボンドはアメリカ、ヴァーモント州生まれ。ブラウン大学を卒業後、イラストレーターの勉強をする。この絵本は彼女の処女作品で、温かい画風で話題を呼び、1999年「ワーキング・マザー」にて子どもたちのお気に入りの1冊に選ばれている。

ストーリーのすばらしさにあわせて、イラストにもいろいろな工夫がみられる。アメリカの家のなかがかくわしくていねいに描かれていて、見るものを飽きさせない。明るく楽しげな家族の絆を連想させるものも多く登場する。部屋の床に置かれたコーヒーカップ。そこで仕事をしてた人だけが飲んだのではない。コーヒーカップはいつも複数出てくる。おじいさんのとなりに誰か。おばあさんのとなりにも誰かがいつも一緒にいる。そこでの会話が聞こえてきそうである。ねこもさりげなく、登場している。本当に楽しい絵本に仕上がっている。

はじめてお母さんになる人や下にもうとかおとうとが生まれてくる子どもにぜひ読んであげてほしいと思う。原作は「Just Like a Baby」あかちゃんみたいに・・・である。

4. 2 「赤ちゃんのはなし」

次も赤ちゃんにちなんだ絵本を紹介する。その名も「赤ちゃんのはなし」である。

前節で家族がその一員の誕生を待ち望み、新しい家族を温かい、やさしい気持ちで迎え入れるという絵本に触れた。本節で紹介する「赤ちゃんのはなし」はもう少し、人間の科学性を盛り込み、いのちとは何か、その不思議さをあらわした絵本である。

絵本紹介：『赤ちゃんのはなし』

■ 書誌情報

絵本の題名	： 赤ちゃんのはなし
絵本作家	： マリー・ホール・エッツ
絵	： 同上
訳	： 坪井郁美
出版社	： 福音館書店
出版年	： 初版1982年6月1日発行
印刷／製本	： 精興社印刷／大村製本
サイズ・ページ数	： 31×23cm 60P

◇ 本の内容あれこれ

「はじめは、とても目のいい人でも やっと見えるか見えないくらい小さなものでした。ほこりのように風にまう干し草のたねより もっと小さなものでした。さらさらの塩のひとつぶより もっと小さく、浜べの砂のひとつぶより もっとちいさなものでした」とはじまるこの絵本。画面の真ん中に見えるか見えないか見極めができない小さな小さな点が描かれている。

それがいったいなにか。それが赤ちゃんとは誰も予想できない。その予想もつかないいのちの事実をアメリカの作家マリー・ホール・エッツは、「赤ちゃんのはなし」にていねいに根気よく、書き上げていった。

マリー・ホール・エッツは、「わたしとあそんで」「もりのなか」など多くの絵本を書き、わが国でも多くの子どもたちに親しまれる絵本作家のひとりである。

この絵本は、今から70余年前の1936年に出版されている。『エッツが夫である医学者ハロルド・エッツ博士の助言をえて、「生命の誕生の美しさを子どもたちに示したい」という想いで執筆された』⁴⁾と松居直が1992年に著した『絵本の現在と子どもの未来』紹介している。

松居はエッツのこの絵本を高く評価し、『人間の力と自然の力が絶妙に調和して、いのちの誕生する様を、これ以上美しく描くことはできまいとおもいます。いのちの誕生が力と喜びにみちていることを、実にやさしく静かに語っています。50年たった今も、医学的にほとんど補う点がないほど内容は正確であると、日本の専門家も感心したほどです』⁴⁾と述べている。

実際、これが絵本？と首をかしげてしまう。それほど個性的である。これを、「細胞の本」、「胎児の本」といってもおかしくないと思わせる。松居が述べていたようにひとつひとつの胎児が大きくなる過程を、医学的な観点からも正確に描いている。この目にもみえない細胞が少しずつ、少しずつ大きくなり、絵本のなかで、虫めがねを使って、顔を見比べるようになっている。

たとえば、胎児が3か月がすぎるときの状況をエッツは次のように書いている。

『3か月がすぎました。やわらかなかべにかこまれたおかあさんの子宮は、ずいぶん大きくなりました。その中で、胎児の家になっているふくろも、その内がわの水のふくろもどんどんおおきくなってきました。けれども、なかの胎児のそだちぶりはそれ以上でした。以下略 腕ものび、手で顔をかくすようなかっこうをしています。目には、まぶたができました。でも、まぶたはまだびったりくっついていて、まだあけることはできません。手足の指先の皮ふにひだが生まれ、つめの土台ができはじめました。歯ぐきのずっとおおくに、歯のもとができました。これが歯になってはえてくるのは、赤ちゃんがこの世に生まれてから だいのちのことです。以下略』

いのちがどうやって作られ、どうやって大きくなって、そして、赤ちゃんになって生まれてくるのか。私たちに想像もつかない科学の営み、自然の営みなのだろう。

その営みをエッツは医学的に正しい絵をもって私たちに教えてくれた。こんなふうには作られていくのだ。こんなにも大変なことなのだ。読者はエッツの偉業にただ頭を下げるしかできない。よくぞこの絵本をつくってくれたものである。



「赤ちゃんのはなし」 マリー・ホール・エッツ 作・絵 坪井郁美訳
福音館書店 1982年

第3章で、松居が説いた母親から赤ちゃんへ語られる言葉の重さを述べたが、松居はさらに、NHK 人間講座松居直 PHO 研究所出版の「絵本のよろこび」のなかで、次のように述べていて興味深い。「さらに言葉は母親からもらったのだと改めて考えていたら、もっと大切なことに今更ながら気がついたこと。母親からもらった最も大切なもの。それが生命である。そして、同時に、その生命の器としての身体をもらい、その次にその生命を支える力となる言葉ももらった」と続けた。⁴⁾ 筆者要約

そして、「私たちは人が生きてゆくのに意味のあるこうした根源的なことをとかく忘れて、子どもに枝葉末節なことを伝えているのではないか」と質問を投げかけ、生命がどう育つのかを子どもにやさしく科学的に語り、しかも誕生の美しさと歓びを感じさせてくれる絵本の傑作としてこの『赤ちゃんのはなし』を紹介している。

また、この絵本がきっかけとなり松居は次のような言葉を思い浮かべた。

「身体髪膚これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」⁶⁾・・・われわれの身体は、髪の毛一本まで父母からもらったものである。これをけがなどして傷つけないように、父母に心配かけないことが孝行の手始めである。・・・という、中国の古典『孝経』⁶⁾の一節である。

5. 親と子どもの絆

5. 1 ウィリアム・スタイグの作品から

前章まで、レベッカ・ボンドとマリー・ホール・エッツ、そして松居の書物から、人のいのちの尊さ、生命の誕生を通して、人間と人間の絆、つまり親と子どもの絆について、検証してきた。

ここで、本論文のテーマである、アメリカの絵本作家ウィリアム・スタイグ (William Steig) の作品について触れていく。

ウィリアム・スタイグ (William Steig) (1907～2003) は、ニューヨークで漫画家、絵本作家として活躍した。1969年『ロバのシルベスターとまほうの小石』を発表し次にコールデコット賞を受賞した。

ウィリアム・スタイグのプロフィール

ウィリアム・スタイグ (William Steig) は、1907年、ニューヨークのブルックリン生まれ。両親はオーストリアから移住。ニューヨークでは、貧しいながらも、父親は左官の職業のかたわら、絵を描き、母親も同様に絵を描くなど芸術を愛し、きょうだいは画家、音楽家、作家、詩人を輩出した。スタイグは幼いころから絵に興味をもち、漫画や彫刻にも打ち込み、1930年以降は雑誌「ニューヨーカー」を中心に漫画家として活躍する。1968年に60歳を過ぎてからの絵本作家としてデビューした。1969年『ロバのシルベスターとまほうの小石』を発表し、1970年にコールデコット賞を受賞した。その後34年の間、数多くの絵本を世に送り出した。『ぶたのめいかしゅローランド』、

『ねずみとくじら』、『ドミニック』、『ぬすまれた宝物』『馬車でおつかいに』、『ものいうほね』、『ケーレブとケート』、『くぎになったソロモン』『ゆうかんなアイリーン』、『みにくいシュレック』、『ピッツアぼうや』などどの絵本も大変印象深く、心にしみわたるような親（人間）の情愛が描かれている。本稿では、『ピッツアぼうや』と『ロバのシルベスターとまほうの小石』を取りあげる。

5. 2 父親と息子 ウィリアム・スタイグが求める家族の姿

では、はじめに『ピッツアぼうや』を取り上げる。この絵本に出会うと、なんて家族ってすてきなのだろうという気持ちに包まれる。この絵本のなかの父親の存在はとても大きい。子育てすべてを母親に任せがちな現代の日本の父親像とは、かなり違う。父親が主導権をもち、息子にかかわっていく。このときのタイミングがよい。息子が不機嫌きわまりない状況のときに父親が出す提案がおもしろいのである。ウィリアム・スタイグの息子に対する姿勢だろうか。または、ウィリアム・スタイグが子どものときに父親からされたことがヒントになっているのだろうか。息子のやりとりのなかに母親もうまく加わって、家族みんなで楽しい時間を共有し、そこには、「この家族の一員でよかった」という安心感や満足感があふれている。家族をテーマに研究する学生にはぜひ一読してほしい絵本である。

絵本紹介：『ピッツアぼうや』

■ 書誌情報

絵本の題名	：ピッツアぼうや
絵本作家	：ウィリアム・スタイグ
絵	：同上
訳	：木坂涼
出版社	：セーラー出版
出版年	：初版2000年3月31日発行
印刷・製本	：図書印刷
サイズ・ページ数	：24×21cm 32P

◇ 本の内容あれこれ

『ピッツアぼうや』は、彼の絵本のなかで、スタイグの作風を象徴する絵本ではないだろうか。彼の代表作はなんといっても『ロバのシルベスターとまほうの小石』であるといわれているが、『ピッツアぼうや』には、格別の楽しさが込められている。子育て中の親と子どもの関係が絶妙である。父親は息子ピートのことをよく観察している。ピートは、友達と遊ぶ約束をしていたのに、雨が降ってきたので、外に行けない。父親は不機嫌きわまるわが子をピッツアにしようとする。生地をこねて、のばしてと母親も加わり、トマト、チーズをのせて・・・とピートをあつあつのピッツアに見立てる両親。不機嫌だった子どもは身も心も幸せ色にそまってしまう。そして、ピッツアが出来上がった頃、雨がやみ、すっかり機嫌のなおったピートが外へ出て行く。

どのページも読み手が自然に幸せな笑みを浮かべずにはいられない。つまり、読み手はピートになってしまっている。読み手はスタイグの魔法にかかり、ピッツアにされ、ニタニタと微笑んでしまう。

S大学の4回生の育児学の授業でこの絵本を取り上げた。

学生たちのほとんどが、この絵本から伝わってくるアメリカの親子関係に、あこがれを抱き、この親子のほのぼのとした情愛に感動していた。不機嫌な子どもが父親のちゃめっけで楽しい発想のおかげで、どんどん幸せ色にかわっていく過程に、家族の役割を感じた学生もいた。こんな親子関係を理想とするという声が大半であり、学生たちにこの絵本に流れている親と子どもの絆の温かさが伝わったと安堵したところで、筆者が予想もなかった意見が出た。母親が「トマトはのせないで」といった場面がある。これは、子どもの偏食を肯定するので、よくないという学生の声が上がったのである。教室は笑いのうずきに包まれた。確かに彼女がいうように「トマトをのせないで」というと、母親はトマトがきらいで、トマトを食べたくないということを認めることにつながる。しかしである。

なぜ教室が笑いのうずには包まれたか。彼女も他の学生も、このせりふがこの絵本のなかで、ユーモラスを高めるものであることを十分理解しており、意見は述べたが、彼女も心から偏食を誘うからよくないとは思っていないのがわかっていたからだと推察する。

この学生の意見から母親のせりふが、父親の気分と息子の気持ちを一気に盛り上げることに成功していることを改めて感じさせられた。やはり、ウィリアム・スタイグは、絵本作りの名人であるといえる。



『ピッツアぼうや』ウィリアム・スタイグ作・絵 木坂涼訳
セーラー出版 2000年

6. 家族の再生

6. 1 『ロバのシルベスターとまほうの小石』について

次にスタイグの代表作である『ロバのシルベスターとまほうの小石』について述べる。

この作品は1970年にコールドコット賞に輝いたもので、発行以来、40年近く、世界中の子どもたちや親から愛されている。子どもたちだけでなく、親たちへも多くのメッセージがこめられている。『親と子の絆』を描いた絵本として、もっと多くの人に読んでほしい一冊である。

絵本紹介：『ロバのシルベスターとまほうの小石』

■ 書誌情報

絵本の題名	：ロバのシルベスターとまほうの小石
絵本作家	：ウィリアム・スタイグ
絵	：同上
訳	：瀬田貞二
出版社	：評論社
出版年	：初版1975年10月30日発行
印刷・製本	：凸版印刷株式会社
サイズ・ページ数	：27.5×20.8cm 35P

◇ 本の内容あれこれ

(1) お話づくりの名人 ウィリアム・スタイグ

場面設定は『ピッツアぼうや』と同様に、単純明快なのであるが、主人公のシルベスターが、追い込まれて、生死にかかわる苦境な状況が用意されている。

シルベスターが偶然見つけたまほうの石により、突然現われたライオンを逃れるために岩になってしまう。これがきっかけで波乱に満ちた、予想もつかない物語へと展開していく。シルベスターは確かに余り頭がよいとはいえない。しかし、人思いでやさしく、父母を慕う気持ちは誰にも負けない。この子ども像は、今の時代には不釣り合いなのか。いや、今の時代においてこそ、「忘れてはいけない最も大切な子ども像ですよ」とスタイグが警鐘を鳴らしたのではないだろうか。ここで前述した松居が紹介した「身体髪膚・・・」の孝経6)のことがふと頭に浮かぶ。

人思いで父母を慕うシルベスター。彼が岩になって、イチゴ山にひとり取り残されている間、願ったのは、ただひとつ。早く元の自分にもどり、父親、母親に会いたい。父親と母親がくれた元の自分の身体にもどること。そ

れは、両親に自分をわかってもらえ、再び愛されることである。あんなに愛して大切にしてくれた両親。その両親に会うためには、目があり、耳があり、長い、ふさふさした毛のしっぽのある元のロボの身体にもどらなくてはならない。愛する両親からもらった身体にもどりた。そんな気持ちを押しこめ、シルベスターは、ただただじっと岩になるより道はなかった。2、3日待てばもとにもどれる？1週間で？いやそんな簡単なものではなかった。岩のままの期間の長いこと。季節は暑い夏を過ぎ、紅葉の見事な秋も過ぎ、真っ白な雪に覆われる冬も過ぎていく。この間の重苦しい気持ちをじーと岩になりきって耐えているシルベスター。・・・

次に遊びに行ったきり帰ってこない息子を心から愛し、心配する父親と母親が登場。あの手この手を駆使し、息子を必死で探す、消息はつかめない。ついにはあきらめの境地に達してしまう。その父親と母親の苦悩やつらさと岩になったままのシルベスターの孤独と虚無感がせつせつと読者に訴えられる。読者は、もどかしさをもって「なぜ、どうしてもどれないの？早く、早くシルベスターを家に帰してあげて」と懇願する。

そして、ついにそのときがくる。春の花が満開の五月のある日、ダンカンさん夫妻はイチゴ山に気をとりなおして、ピクニックに出かける。そして、あのシルベスターの岩“その岩”に腰かけるお母さん。岩のそばにパラソルをかけるお父さん。そして、あの不思議なまほうの石も岩のそばに落ちている。なにかが起る予感。きっと何か起る。読者はどきどきして、その瞬間を待つ。父親がまずまほうの石を見つけ、「やあ、かわった石だな、シルベスターが見たらよろこぶだろうに」といって“その岩”のうえに置く。ここで見逃してはならないのが、ダンカンさんという父親はわが子の趣味の「石あつめ」について、よく理解しているということである。ここにこの絵本の醍醐味がひとつあるのではないだろうか。

物語の一番はじめのページでシルベスターが石をあつめている場面が表現されているが、自分の子どもの好きな遊びを理解し、共感し、たぶん親子でその趣味に対する会話も交わされていたのだろう。その親子関係があり、この物語が完結する。また、お母さんもすばらしい。お母さんは岩のうえにお弁当を広げたときから、むなさわぎをおぼえる。シルベスターが生きていて近くにいる気配を母親が感じとる。この母親のむなさわぎは母親としての本能である。父親の役割と母親の役割がみごとに解け合い、物語はクライマックスへ進む。両親の思いを知ったシルベスターが最後の力をしぼって「ああ、もとのぼくにもどりた。ああほんとのぼくにもどりた！」と真剣に願うと、なんと奇跡が起きた。岩からロボに。シルベスターがシルベスターにもどった。なんとという奇跡。・・・そのあとはご想像にまかせますと読者に楽しみを与えてくれる。

そして、家族が家の居間のソファで抱き合うシーンでこの絵本は終わっている。あのまほうの石はどうなったか。今は鉄の金庫にしまわれている。いつかはまほうをつかいたくなるときがあるかもしれないが、今のところ、「息子が無事帰ってきたこと」「早く、もとの自分にもどりた」という家族みんなののぞみがかなったのだから、それだけで十分だというメッセージを残して。

6. 2 突然の子どもの行方不明

息子が帰ってこない間の両親の心配、不安、寂しさは読むものの心にしみわたってくる。スタイグの描く両親の表情から、息子を思う心情が痛いほど突き刺さる。心配でたまらなく、ご近所に聞いてまわる場面が現れるが、スタイグはこの場面がこの絵本の表紙に選んだ。このページこそ、この絵本のなかで一番に作家が訴えたかったものではないだろうか。帰ってこない息子を探し求めて、隣近所に聞きまわる両親の切ない思い。親とはこんなに弱く、そしてこんなに必死なのである。ただひたすら子どもの帰りを願っている。ロボのダンカンさん夫妻が地球上のすべての親の代弁をしている。「愛する子どもよ。私たちはあなたを必死で守りたい。あなたの幸福をひたすら願っている」

親が子を思うこと、これは当然のことなのだろう。しかし、現実の生活のなかでは、なかなか親から子どもへの愛を伝えることが難しい。とくに、日本人は、愛情表現が苦手であるといわれる。

だが、今の時代を生きる親子は、しっかり親子で向き合い、自分たちの思いを伝えあうことが必要である。「あなたのことがとても大切。あなたはお父さん、お母さんのたからものだよ」という親の思いが子どもの心に届いたら、家庭崩壊などは起こらない。子どもだって、親の気持ちには応えようとするものである。親から愛されていることを実感する子どもは、親を求め、親への信頼、親への思慕を強め、人間同士の絆が結ばれていく。その過程が、

実は大変重要で意味のあることなのに、それぞれの多様な価値観を理由にその過程が薄らいでしまっている。大人の読者は、本書から、自分の親ぶりを振り返り、反省させられてしまう人が多いのではないだろうか。スタイグは読者にそこまで、訴えようとは思っていなかっただろうが、この表紙やわが子を思う親の表情ひとつひとつが読者の親心に強く響くのである。

6. 3 子どもの本のなかの芸術を求めて

ここで、この絵本に対するスタイグの思い、つまり絵本作りに対する姿勢について触れておく。

スタイグは、20台後半から「ニューヨーカー」誌に多くのイラストや漫画を発表しはじめた。1968年、61歳から子どもの本を描くようになり、「ロバのシルベスターとまほうの小石」は3作目である。その作品が1970年度のコールデコット賞を受賞した。その受賞時のスピーチでスタイグが語ったことばが大変印象深い。

そのスピーチによると彼のこの作品づくりに最も影響を与えたのが、子どものときに読んだコロッディの「ピノッキオ」だと彼はいう。「ピノッキオの冒険」を読みながら、はらはらしたり、どきどきしたり、うれしくなったり、不思議に思ったりしたことは、その後長い年月がたった今でもよく覚えていると続け、次のように述べる。「シルベスターが岩になり、またロバに戻るという絵本のストーリーも木でできたピノッキオが生きた人間に憧れることに、少年の日のわたくしが深く、心を動かされたところから生まれてきたものかもしれません」⁷⁾

コロッディはイタリアの作家であり、「ピノッキオの冒険」は1883年に出版された創作童話である。100年も前に出版された作品であるが、世界中の多くの人から愛され、読み継がれている。スタイグがこの「ピノッキオの冒険」のなかに描かれている“子ども像”に影響を受けたという。

木で作られた人形ピノッキオがさまざまな経験を通して（甘い誘惑、裏切り、挫折、失敗、間違い、葛藤、労働、勤勉、良心、父親への献身的な愛情）、どんどん成長していく姿に、スタイグは感動したのであろう。この姿は“不確かで危なげな子ども像”から“一人の独立した人間像”へと成長していく人間形成の過程をあらわしていると考えられる。

本書のロバのシルベスターもピノッキオと同様、岩になる過程“不確かで危なげな子ども像”から、ロバにもどる過程“一人の独立した人間像”へとたどっていく。

その間の両親の支え、愛情は、ジェッベットじいさんが、精魂こめてピノッキオを作り、唯一自分の一張羅の服を売ってピノッキオを学校へ行かせるための教科書を買ったりと心もお金もすべてピノッキオに差し出す献身的な愛情と同等のものである。

このように子どもの時代に影響を受けた作品から、スタイグは本書を生んだ。スタイグはこのような児童文学を含む芸術について、さらにスピーチでこのように続ける。

「わたくしたちは当然のことながら、子どもを大事にし、子どもたちのなかに将来の希望を見出しますが、子どもという存在が大きな意味を持っているというだけでなく、芸術を通して子どもに手渡すものにも大きな意味があることを、十分に意識しているつもりです。以下略 児童文学をふくむ芸術は、地上のどんな場所をも宇宙の中心にすえることができます。また、本当は理解していないことを理解しているかのような幻想を与えやすい科学と違って、謎を謎としたままで人生について知ることを助けてくれます。驚いたり不思議だと思ったりする感覚を強めてくれる、といってもいいでしょう。そして不思議だと思うことは、人生に敬意を払うことにつながります。芸術はまた、冒険心や遊び心を刺激して、私たちが生き生きと人生を送るのを支え、有用な発見をもさせてくれるのです。私は、子どもの本のことを大まじめに考えています。おとなの仕事もそうですが、子どものための仕事を多くてがければ手がけるほど、芸術としての条件を満たすようなことに近づいていけることを私は願っています」⁷⁾（下線筆者）

これは、スタイグの絵本づくりにかける情熱を現したスピーチとして大変貴重なものであると筆者はとらえた。その理由は、日本においてはスタイグについての評論、書評、文献などが少なく、彼の芸術観、絵本観に触れるということがなかなかできないからである。

スタイグの芸術へのほとばしるような憧憬に接し、スタイグと同じく、子どものための本についてリリアン H・スミス女史が著した児童文学論で、紹介したフランスの文学史家のポール・アザールのことばを思い出した。ここ

で紹介する。

「ポール・アザールは言う。「私たちは、子ども時代に、人生の重みをひきずらないで生き、またそこで私たちの人となりか形づけられてゆくばかりではなく、人生の幸福の最もよい分け前をまずうけとるものなのに、この幸福で豊かな子ども時代の年月を、おとなたちは踏みこじろうとするのである。」つぎにことばをつづけて、よいと思うさまざまな本のことをこう述べる。「芸術の本質に忠実である本。つまり、子どもたちに、直感的にまっすぐにもものを知る道を教える本。子どもたちに即座に感じられ、その時起した魂のときめきが一生つづくような、簡素な美しさを持つ本。」またかれは、次のような本をよい本とみとめている。「あらゆるものの生命を尊重する気持ちを子どもたちに与える本」「遊びというものの力強さと尊さを大事にしている本。知性や理性の訓練がかならずしもすぐさま役に立つ実的なことを目的とすることはできないし、また、してはならないことをわきまえている本。」⁸⁾（下線筆者）

ポール・アザールは自由なスタイルで児童文学の本質をついた『本・子ども・大人』を著し、児童文学の研究に功績を残した人であり、彼の理想とする子どもにとってよい本がスタイグが求めてやまなかった芸術への追求と同等であったことを特記しておく。

スタイグは、2003年に亡くなるまで、このスピーチの主旨を自己の永遠の課題にし、多くの絵本を手がけた。

スタイグの芸術への憧憬は、本書にもその強い思いを読み取ることができる。

本書のストーリーと絵の融合は、子どもには本当の美を、みせかけでない本物を与えたいという思いが絵本のそれぞれのページにあらわれている。ダンカンさん一家の楽しい居間、ロバをねらいそこねたライオンの表情、イチゴ山の星空の気の遠くなるほどのさびしい美しさ、ダンカン夫妻の子どもを心配する表情などなど、どのページをとってもいねいに描きこまれている。

とくに美しいのが、秋がきて、木の葉がにしきになった場面、風が吹きすさび、真っ白な銀世界のイチゴ山、そして、あたたかい春の訪れという季節の移り変わり。この春の場面では、きつとなにかいいことが起こりそうと読者に期待をもたせてくれる。単純で明快なタッチではあるが、スタイグが大切にする芸術へのあこがれを十分に感じ取れる醍醐味がある。子どもに与える絵本をより芸術に近づけようと作品づくりに力を注いだスタイグ。そんな作品だからこそ、まわりは本書をコールドコット賞に選んだのである。



『ロバのシルベスターとまほうの小石』
ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳
評論社 1975年

7. 結びに

現在、わが国では、子どもの行方不明、いじめ、自殺などさまざまな子どもに関わる事件が多発し、親は常に不安を抱えており、その対応に心を痛めている。

わが子がある日、何の前ぶれもなく、帰宅しない。その家庭では、どんな苦しみが続くのだろうか。毎日、毎日親は死にものぐるいになって、わが子を探すであろう。このシルベスターの両親がそうであったように、生きているはりあいも無くしてしまうであろう。生きていること。家族としてつながっていること。それは本当にかけがえないものである。

スタイグはここで読む人すべてに、大切なメッセージを伝えてくれた。わが子を愛し、慈しみ、育てること。これは、人類の永遠の課題である。そして、シルベスターの両親はこの課題に忠実に夫婦助け合って向かっていった。それも無償の愛情で。その結果、シルベスターは両親を慕う心を自然と身につけた。子どもたちも実は親に負けないうらい、親を思ってくれている。ここには家族の絆がある。家族の絆は新たなチャレンジで再生できるのである。お互いの気持ちを伝えあい、お互いを知り合い、お互いを尊重しあう。ときには、なまけたり、衝突したり、逆風も吹くだろう。しかし、お互いに信じ合おう。一人の人間同士として。松居が「家庭こそ本当の言葉が語られる場ではないか」と投げかけたとおりの家庭にもう一度もどそう。私たちみんなの幸福のために。

【引用文献】

- (1) 『絵本を見る眼』松居 直著 日本エディタースクール出版部 1978年
- (2) 『保育所保育指針』厚生省 児童家庭局 1999年
- (3) 『大辞泉』監修松村明編集委員 小学館 1995年
- (4) 『絵本の現在と子どもの未来』松居 直著 日本エディタースクール出版部 1992年
- (5) 『絵本のよろこび』松居 直著 PHO 研究所出版
- (6) 『孝経』古代中国の書物 十三経のひとつ
- (7) 『ロバのシルベスターとまほうの小石』から スタイグのコールデコット賞受賞スピーチ
- (8) 『児童文学論』リリアンH・スミス著 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男共訳 岩波新書1964年

【絵本】

- 『あかちゃんのゆりかご』レベッカ・ボンド作・絵 さくまゆみこ訳 偕成社 2002年
『赤ちゃんのはなし』マリー・ホール・エッツ 作・絵 坪井郁美訳 福音館書店 1982年
『ピッツアぼうや』ウィリアム・スタイグ作・絵 木坂涼訳 セーラー出版 2000年
『ロバのシルベスターとまほうの小石』ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社 1975年
『もりのなか』マリー・ホール・エッツ 作・絵 まさきりこ訳 福音館書店 1963年
『わたしとあそんで』マリー・ホール・エッツ 作・絵 よだじゅんいち訳 福音館書店 1968年
『ぶたのめいかしゅローランド』ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社1976年
『ねずみとくじら』ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社 1976年
『ばしゃでおつかいに』ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社 1976年
『ドミニック』ウィリアム・スタイグ作・絵 金子メロン訳 評論社 1977年
『ぬすまれた宝物』ウィリアム・スタイグ作・絵 金子メロン訳 評論社 1977年
『ケーレブとケート』ウィリアム・スタイグ作・絵 あそうくみ訳 評論社 1980年
『ものいうほね』ウィリアム・スタイグ作・絵 瀬田貞二訳 評論社 1987年
『ゆうかななアイリーン』ウィリアム・スタイグ作・絵 小川悦子訳 セーラー出版 1988年
『くぎになったソロモン』ウィリアム・スタイグ作・絵 小川悦子訳 セーラー出版 1989年
『みにくいシュレック』ウィリアム・スタイグ作・絵 小川悦子訳 セーラー出版 1991年

【参考文献】

- 『愛と憎しみ』宮崎 音弥 岩波新書 1963年
『子どもを産む』吉村 典子 岩波新書 1992年
『絵本とはなにか』松居 直 日本エディタースクール出版社 1973年
『本・子ども・大人』ポール・アザール 矢崎源九郎・横山正矢共訳 紀国屋書店1957年
『あかちゃんなぜなくの』ウィニコット 猪股丈二訳 星和書店 1985年
『子どもとことば』岡本夏木著 岩波新書 1982年
『児童虐待』池田由子 中公新書 1987年
『ピノッキオの冒険』カルロ・コルローディ原作 インノ・チェンテェイ絵 金原瑞人訳 西村書店1992年